The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シェリング「悲劇論」の分析
Author(s)	市村, 俊信
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1996, 30, p. 25-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48185
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シェリング「悲劇論」の分析

市村俊信

ταῖς μνήμαις ἐκείνης τῆς ἡμέρας

シェリングの『芸術哲学講義』の末尾近く、「悲劇について」と題された章を本論攷は分析していく。古代ギリシアの悲劇を主題に論じるシェリングの悲劇論の核心をあぶり出すのが目的である。(1)

一

シェリングの悲劇論を理解するのに最低限必要な点のおさらいからはじめることにする。(2)

シェリングは「芸術の哲学」を講義するにあたって、芸術の理論と芸術の哲学とをはっきりと区別している（V, 368; V, 350sqq.〔vid. V, 357n.〕; *BuD*, II, 435sq.）。それによれば、理論はわれわれが経験において出会う個物としての対象（芸術の理論であれば芸術）について、そのつどの個々の知識を問題とするが、哲学は、たとえば芸術の哲学であれば、芸術という対象における普遍的なものを問題とする。そのうえ理論であれば、自然の理論、歴史の理論、芸術の理論などとその対象によってそれぞれの内容は完全に区別されるが、哲学であるならば、自然、

歴史、芸術とその対象として何を選ぶにせよ、そこに見出される普遍的なものは対象のいかんにかかわらずつねに同一のものなのであり、それゆえ自然の哲学も芸術の哲学も、まったく同じものを、シェリングのいう絶対者を呈示するという点でなんらかわりはないとされている。

哲学を理論から区別する本質的な特徴として、絶対者の呈示ということが挙げられるようになるまでには、当然ながら前史がある。カントが純粋理性と実践理性の二つの原理をいわば並立させてしまって以来、これを唯一の原理のもとに組み立て直そうとする動きは時代を覆う伝染病のように広まって、やがては若きシェリングをも完全に虜にしてしまった。さきにフィヒテが示した解決策にも充分には満足しきれなかったシェリングは、[3] 独自のアイディアを練り上げついにはそれを「同一性哲学」として打ち立てることになるのである。

同一性哲学の基本的なプランをまとめれば、以下のようになる。二元論の克服として目指されているのは、原理の一元化である。とはいえ、カント以来の二つの原理に共通するただひとつの本源的な原理を見出せないまま、一方を切捨て他方を選択しても、本質的な解決にはならないとシェリングは考えていた。そこで一元的な原理にふさわしいものとして、「絶対的同一性」という原理をあらたにおいてみる。この絶対的同一性は、自己を二重化し自己自身を生産する行為であり、行為の二重性による自己生産としての同一性である。現実に存在するいっさいの個物は、この絶対的同一性の行為によって存在していて、結局はこの絶対的同一性そのものにほかならない。つまりおよそ存在しているのは絶対的同一性という行為者、すなわち「絶対者」だけである。この絶対者だけが真に実在しているのである以上は、さまざまに異なる姿をもって日常に見出される個物のひとつひとつも、そのすべてが絶対的同一性そのものなのである。それぞれの個物がふだん呈するさまざまな差異は、けっしてそれ自体で実在して

いるのではなく、差異をもつ個物というしかたで絶対者に与えられた、たんに理念の上での限定にすぎない。そしてこの絶対者に与えられた理念的限定の総体が宇宙と呼ばれる。したがって唯一絶対の存在者が、その同一性の面から捉えられれば絶対的同一性としての絶対者なのであり、その総体性の面から見られたときには宇宙ということになるのである。

このような「同一性哲学」という前提のもとで、哲学は「宇宙のひとつの忠実な像」(V, 366) でなければならない。それというのも、さまざまな差異として現実に存在している対象ひとつひとつに、宇宙という絶対者の普遍的連関の内部での正しい位置を「あらかじめ必然性をもって」(V, 419) 指示することが、哲学の仕事だからである。こうして自然の哲学も芸術の哲学も、唯一普遍的なものとしての絶対者の呈示という点ではかわりがないことになる。ではあらためて芸術の哲学という限定は何を意味することになるのだろうか。

そもそもが『芸術哲学講義』のなかのこととはいえ、シェリングは哲学と芸術とのあいだにかなり緊密な関係を認めている。

> 芸術もまた、無限なものを呈示するものとしては哲学と同じ高みに立っている――哲学が絶対者をもとの姿のままで (im Urbild) 呈示するように、芸術は絶対者を目に見えるように映し出させて (im Gegenbild) 見せるのである。(V, 369)

哲学と芸術の関係をこう捉えたうえで、シェリングは芸術の哲学を、芸術といういわば魔法の鏡 (V, 351) に映し出された宇宙の姿を呈示することだと規定する。[4] これは『芸術哲学講義』の第二部が実際にそうなっているように、さまざまな理念上の限定としての芸術の各ジャンルを一つの連関のもとに必然性をもってまとめること、つまりは体系的なジャンル論ということになる。

それぞれのジャンルのあいだを連絡して相互に関連づけるためにシェリングが採用した方法論の詳細についてはここではぶくが、文芸なら文芸という大区分のなかに三つの下位区分（抒情詩、叙事詩、劇詩）が置かれ、それぞれが段階的に展開していくと説明されている。[5] 次にそれをみていこう。

まず第一段目にあたる抒情詩の場合、主観的な詩としてその主調をなすのは特殊性（詩人や主人公の心情、個別的な出来事や苦悩などが歌われる）と差異性（韻律や素材の多様性など）であり、無限なものと有限なものとの対立がつねに主観の側に還元され、それゆえ自由という性格をもつ、とシェリングは説明している（V, 639sqq.）。これとは反対に第二段目にあたる叙事詩では、韻律の一様性や素材の共通性にみてとれるように、同一性が基調となっているとされる。『イーリアス』第十六巻のなかで（Hom. Il. 16. 426–461）、ゼウスが死ぬべき定めにあった息子を、わが子可愛さのあまり救けようとしたときに、ヘーレーがゼウスをたしなめゼウスも泣く泣く思いとどまり息子の命をあきらめた場面を引きながら、叙事詩の描く神々と人間の世界は定めとの最高の同一性のうちにあり、ゼウスですらもそれに従うように、いかなる反抗も抵抗もないまま定めが静かな必然性として現れ支配しているとシェリングは説明している（V, 644sqq.）。最後、第三段目が問題の劇詩（ドラーマ）であるが（V, 687sqq.）、三段目は一段目と二段目を綜合するもの、すなわち対立と同一性、自由と必然性がそこで一つに溶け合っている段階とされる。したがって抒情詩と叙事詩に与えられた規定を足していけば、劇詩の規定が得られることになる。抒情詩にはすでに主観の自由はあったが、対立までもが結局は主観の側に帰されていて、そこには真に客観的な対立は認められなかった。叙事詩には必然性が現れていたが、すべてがそれに従っているために同一性が実現していて、必然性そのものであることが結果的には失なわれていた。そこで第三段階としての劇詩が果たすべきことは、自由と必然

性のどちらもがまさにそのものとして現れ、両者に実際のかつ客観的な対立があり、しかもどちらかが劣勢になることなく均衡を保ち――均衡が崩れると不調和が生じて詩的でなくなる（V, 690）――ついには絶対者のうちにある真の絶対的な無差別」（l. c.）が実現されること、となる。「したがって〔劇詩である〕悲劇において本質をなすのは、主観における自由と、客観的なものとしての必然性とのあいだの真の争いであり、しかもこの争いは、どちらか一方が敗れることで終わるのではなくて、双方が同時に勝ちかつ敗れるというようにして、完全な無差別のうちに現れることで終わるのである」（V, 693）。これが演繹的に得られた、シェリングによる悲劇の定義である。

二

悲劇の定義に関して残る疑問のうち、そもそもどうして争うのかという点から明らかにしていくことにするが、その原因については、シェリング自身が定義のすぐ後ではっきりと示している。この点からみていこう。

「必然性が災い（Übel）を課すとき、そのときだけ必然性は自由との本当の争いのうちに現れることができる」（V, 694）。しかしながらどんな災い、あるいは「不幸（Unglück）」（l. c.）でもよいというわけではないらしい。シェリングの挙げるふさわしくない例は、たとえばオデュッセウスの場合である。帰郷に際して次々とオデュッセウスを襲う不幸の数々は、それと等しいだけの力（身体能力にせよ奸智にせよ）で克服されうるものであり、真の自由をオデュッセウスのうちに喚起することはないとされる。また人間にはどうにもならないような不治の病いのようなものにしても、しょせんは身体的な不幸であって、それを耐えるのに必要な自由がたいした自由でない以上は不充分である、とシェリングはみなしている（V, 696）。

かつてアリストテレースは『詩学』のなかで望ましい筋の構成法を論じる際に、悲劇の主人公が「悪業や性根の悪さのために不幸に陥るのではなくて、そうではなくてある過失のために」(Arist. *Poet.* 1453a8–10) 不幸に陥る場合を推奨した。シェリングはひとまずこれを正しいとする — 知性のレベルでみたならば、と限定をつけて。しかしシェリングによれば、同じことをより高い視点からみることもできるし、またそうしなければならない。「ある人物が過失のゆえに犯罪を犯してしまう。これにさらにつけ加えるべきは、この過失が必然性ないしは神々によって課せられるものである(…)ということである」(V, 720)。したがってシェリングによれば、「考えられうる最高の不幸とは、本当は罪もないのにかかわらず、運命のゆえに罪を負うことになること」(V, 695; cf. 699) であり、罪そのものが必然性となることである。およそ犯罪や罪は、直接的にであれ間接的にであれ「必然性の仕業 (Werk der Nothwendigkeit)」(V,709) であり「運命の仕業 (Werk des Schicksals)」(V,696) であるということが、「悲劇の根本原則」(V, 709) だとシェリングはみているのである。

これにあてはまる例は、たしかに現存するギリシア悲劇の作品にいくつも見出せる。実際にシェリングが例として挙げているオイディプースの場合でも、神託が予言した「運命を避けるために」(V, 696) コリントスから逃げ出したにもかかわらず、「運命の意志、避けがたい宿命、神々の報いによって」(V, 695) 最大の不幸のために生かしておかれ (Soph. *OT.* 1180)[6]、ついには「アポッローンだこれを、アポッローンなのだ、友よ、このひどい俺のこの俺の苦しみを成し遂げたのは」(*OT.* 1329sqq.; cf. *OC.* 266sq. *ἐπεὶ τά γ' ἔργα με / πεπονθότ' ἔστι μᾶλλον ἢ δεδρακότα*, 964–968, 997sq.) と叫び、まさにシェリングの「悲劇の根本原則」を裏書きしている。運命はまたソフォクレース『アイアース』のなかで、テクメーッサをして「人間にとって、必然の運命よりも大きな悪はありま

せん」（*Aj.* 485sq.）とまでいわしめるものであるが、ともかくこの運命こそが、さきに挙げたシェリングの悲劇の定義にある必然性のいわば供給源であり、それゆえまた「争い」の原因であると考えられていることは明らかである。このなんとも苛烈な運命の受け手の側についても、ここで検討しておく必要があるだろう。

ギリシア悲劇におけるコロスを、シェリングは「筋の進行に伴う反省が客観化されて舞台上に呈示されたもの」（V, 706）とみなしている。したがってコロスの使命とは、「観客のうちに生じる心の動き、共感、反省を観客よりも先取りすること」（l. c.）とされるが、そうだとすれば、避けがたい運命に翻弄される悲劇の主人公を目のあたりにした者の思いは、たとえばソフォクレース『アンティゴネー』のなかのコロスのせりふ――「死すべき者には定められた不運から逃れる道はないのだから」（*Ant.* 1337sq.）――が典型的に代弁しているといえよう。同じソフォクレースの『フィロクテーテース』においてネオプトレモスもいうように、そもそも「人間にとって、神々から与えられた運命に従うことは必然的なこと」（*Phil.* 1361sq.）なのだとすると、人間にはどのようなふるまいが残されているのだろうか。

それはシェリングによれば、神ならざる身としての持ち前を自覚し、分別をけっしてなくさず人間の分を弁えこれを越えないようにすることなのであり、さらにシェリングはそれを、ギリシア悲劇のなかに見出されるあるべき人間の姿、すなわち人間の倫理の問題として論じている。シェリングによれば、一般に倫理性（Sittlichkeit）とは「ある時代、ある国家の精神でありかつ生命である」（V, 708）のだが、「古代の悲劇において、最高の倫理性は人間に定められた制限と限界をそれと認めることのうちにある」（V, 420）とされている。このような、人間としての分別を守るという考えは、実際のギリシア悲劇のなかでも、しばしばせりふにのぼっている。たとえばアイス

キュロスの『アガメムノーン』では、それが第一スタシモンを通じてくりかえされるテーマであるし（cf. Aesch. *Eum*, 535sqq.）、ソフォクレースの描く英雄アイアースは、人間にふさわしい分別を越えたために（*Aj*, 777）女神アテーナーの不興を買い死にいたる。同じソフォクレースの『アンティゴネー』ではハイモーンが、「神々は人間に分別を与えて下さっています、あらゆる持ちもののなかで最も尊いものです」（*Ant*, 683sq.）といい、さらに劇の最後でも、「分別を備えていることがなんといっても幸わせの第一、けっして神々を冒瀆してはなりません」（1348sqq.）とコロスによってくりかえされている。

三

ギリシア悲劇に見出される人間の倫理性は、シェリングによれば「とりわけソフォクレースにおいて最高に磨きあげられるにいたった、すべてのギリシア人に共有され、ギリシア人のつくり出すあらゆる作品に刻み込まれた、神々に対する人間の従属的関係の感情」（V, 417）[7] にほかならず、それはまた人間の驕り高ぶり、冒瀆的な行為に対する嫌悪の感情でもある（l. c.）。こうした感情がひとびとに共有され、「時代、国家の精神にして生命」として成立する経緯について、シェリングがそれと明示しないまま前提していたと思われる解釈を、つぎに探っていくことにする。それは、『芸術哲学講義』のなかにみられる、一見したところでは相互に矛盾し合っているようでもある、シェリングのプロメーテウスについての幾通りかの言表を、すでに確認した抒情詩、叙事詩、劇詩の展開という図式を下敷きにして統一的に把握することで得られるだろう。

プロメーテウスについてシェリングは、悲劇を論じるところだけでなく、それも含めた『芸術哲学講義』全体の

なかで、前後三回にわたって（V, 623, 625, 709）、プロメーテウスこそが悲劇の原型であるとくりかえしいっている。[8] そのうちで「悲劇の原型」とされる理由がはっきりと示されている箇所は、つぎのような具合である。

> アイスキュロスの描いた[9]プロメーテウスは、外から与えられる痛みによってというよりも、むしろ不正［cf. Aesch. *PV.* 1093］と抑圧に対する内側からの感情によってより深く苦しむのであり、またプロメーテウスの苦しみをもたらすものが、運命ではなく、新しい神々の支配者の暴虐ぶりなので[10]、その受難の苦しみは、屈伏としてではなく、反抗として反乱として現れるのである。しかも個人的な苦しみのなかでプロメーテウスをつき動かすのが、ゼウスによる耐え難い支配に対する普遍的な反抗であるがゆえに、まさにそのためそこでは自由が必然性に勝利するのである。プロメーテウスは偉大な人間性の原型であり、それゆえまた悲劇の真の原型なのである。（V, 708sq.）

シェリングによるこのような解釈が、『縛られたプロメーテウス』の解釈として妥当であるかどうかということ以前に、まずもって問題となるのは、さきに確認した悲劇の定義においては、自由と必然性がどちらも相手に屈することなく同時に勝利するとされていたにもかかわらず、ここでは「自由が必然性に勝利する」という、定義に反した説明がなされていることである。さらには、真の争いをもたらす条件とされていた必然性が、ここでは「運命ではない」とされていることも問題である。このように上に引いた箇所は、これまでみてきたかぎりでのシェリングの悲劇解釈とはかならずしも一致していないが、それにもかかわらずそこでは、プロメーテウスが悲劇の原型だと主張されているのである。

たしかに『縛られたプロメーテウス』のなかには、ゼウスが、さきにみたシェリングのいう意味での運命に匹敵するような絶対的な必然性にはあたらないことを示すせりふがいくつもある。それはたとえば、人間にあらゆる技を教えるほどに技術にすぐれ、伝説によっては人間そのものすらつくったともいわれているプロメーテウス[11]なのに、

（プロメーテウス）　しかし技術ですら必然に比べればはるかに無力だ。
コロス　それでは誰が必然の舵をとっているのでしょうか。
プロメーテウス　三つの姿をもつ運命の女神と忘れることのない復讐の女神だ。
コロス　ではゼウスもそのかたたちより弱いのですか。
プロメーテウス　いや奴にしても運命からは逃れられない。（*PV*. 514-518）

といっていることにはっきりと示されていよう。

しかしそうなると、そもそものシェリングの悲劇の定義からして怪しくなってくることにもなりかねないから、シェリングの真意を明らかにするために、シェリングが描いてみせるプロメーテウスの別の側面について検討してみなければならない。それは、さきにみたプロメーテウスがみずからの意志によって（*PV*, 266 ἑκὼν ἑκὼν ἥμαρτον, 543sq）、ゼウスに屈伏するのではなくゼウスに反抗するプロメーテウスであったのとは対照的に、まさに縛られたプロメーテウスの姿である。

プロメーテウスのなかでは自由が神々からの独立として現れてくるので、そのためプロメーテウスは縛りつけられて、ゼウスがよこす、プロメーテウスのつねにもと通りに育ってくる肝臓をかじる鷲によって、永遠に苦しめられることになるのである。このようにして、プロメーテウスは全人類を代表して、全人類の痛みをひとりで耐えるのである。たしかにここには無限なものが現れてきてはいるが、それは現れるやいなやふたたび縛りつけられ押しとどめられ、制限されてしまうのである。（V, 420）

縛られ苦しめられるプロメーテウスについて語りながら、ここでシェリングがいおうとしていることの核心は、プロメーテウスがいまや永遠に耐え続けなければならない運命が、ほかでもないゼウスそのひとから与えられたということであり、それはまた、ゼウスですらも運命からは逃れられないといわれた、あの叙事詩の世界秩序がすで

に完全に失なわれているということをも示唆している。したがってここでは、ゼウスがまさに絶対者としての立場を確立して、みずからが運命そのものとなる過程が前提されているのである。そしてそれはまた同時に、絶対者としてのゼウスの完成のためにあらたに生じた新しい世界秩序、すなわち必然性としての神々とその神々からの独立を果たした人間との関係が成立したことをも意味するのである。これはとりもなおさず、シェリングのみる悲劇の世界秩序そのものが成立したことにほかならない。

しかしながら必然性としてのゼウスの絶対的支配はまだ確立されかけたところであり、[12]『縛られたプロメーテウス』においても、じつに九回もゼウスの若さ、新しさが指摘されている（*PV*, 35, 96, 149, 310, 389, 439, 942, 955, 960）ことが、そのことを端的に示している。だからこそゼウスは、神々と人間とのありうべき、つまり人間が守るべき関係を――そしてこれこそがすでにみたシェリングのいう「神々に対する人間の従属的関係」なのであるが――人間に教えるべく、人間の祖先ともいうべき（cf. V, 554）プロメーテウスを人間の代表として選んで、人間のために人間にかわって苦しみを味わせ、そうしてその姿を、いわばみせしめとしたということになるのではないか。

『縛られたプロメーテウス』のなかでオーケアノスが、「プロメーテウスよ、あなたのその災難こそが手本だ」というのに応えて、プロメーテウスが「いまのその分別をなくさないように」という場面（*PV*, 391sq.）などは、こうした事情を典型的に示しているし、プロメーテウス自身が、劇中で何度も、縛られ苦しい思いをしている自分の姿をよくみておくようにといっている（*PV*, 92, 93sqq., 119, 141, 304, 1093; cf. 69sq.）。あるいはまたイーオーが、まだまだ続く放浪の途中、自分の悲惨な姿に加えてみずから目にしたプロメーテウスの不幸な姿をも、行

く先々で「地上の涯てまで」(*PV*, 846) 伝える可能性もあるだろう。そしてこのイーオーから数えてはるか十三代目にあたる子孫 (*PV*, 774)、すなわちヘーラクレースがプロメーテウスを解放し、それをゼウスもよしとするが、これはそれだけの長い年月を経て、ようやく人間が自己に定められた限界を充分に弁えることができたとゼウスが認めたからであり、プロメーテウスも全人類のための手本という役目をそうして終えることになったからだと考えられよう。

したがって『縛られたプロメーテウス』こそ、神々という必然性に対して人間が守るべき倫理が確立する過程を予告するものなのであり、だからこそシェリングは、「プロメーテウスが倫理性の原型である」(V, 420) とするのである。そしてこのように考えてくるならば、「悲劇の真の原型」であるとシェリングがいうプロメーテウスとは、ゼウスを助けて (*PV*, 216–222) 絶対者への一歩を踏み出させ、ゼウスに反抗することでさらにゼウスの絶対化を促し、そうすることによってまた必然性との本当の対立の可能性を開き、その結果、真の対立を前提とする劇詩への第一歩をもたらすことになるような、いわば悲劇芸術の祖 (cf. V, 623) であるプロメーテウスということになるだろう。(13)

四

『縛られたプロメーテウス』がその成立の経緯を伝えている悲劇の世界秩序は、人間に対してきわめて厳しい現実を突きつけてくる。叙事詩の世界という「神々と人間がひとつになっている幸福な状態」(V, 702) はもはや過去のものであり、そこにあるのは神々という必然性に対する人間の従属的感情だけである。その神々は、人間に守

るべき倫理を要求しながら、まるでそれがほかの方法では身につかないとでも考えているかのごとく、罪のない人間をなんのためらいもなく罪に陥れる。そしてこの、人間にふりかかる運命の一撃が必然的になされるという点こそが、シェリングが悲劇に認める根本的な原則であった。とすれば、運命という必然性の仕業によって、罪もないのに罪を負う主人公の行為を描き出す悲劇とは、まさに運命の劇(14)としかいいようのないものである。シェリングにとって悲劇とは、まずもって運命の悲劇なのだといえよう。

しかしながら思い出してみれば、シェリングによる悲劇の定義は、運命という必然性につきるものではなかった。定義においてはたしかに、必然性がほかでもない必然性そのものとして現れていて、しかもその必然性が考えられうる最大の災い、最高の不幸をもたらすこと、すなわち罪なき罪人を生み出すことが求められていた。このかぎりで、シェリングの考える悲劇が運命の悲劇であるとすることは、けっして誤りではないだろう。しかしそれで充分とするのは早計にすぎる。そもそも最大の不幸が必要とされていたのは、それによってはじめて真の自由が喚起されるからであったし、シェリングの悲劇の定義にあったのも、まずは「自由と必然性とのあいだの真の争い」であった。必然性とその必然性が招く最大の不幸について、シェリングがどのように論じ、また実際の悲劇作品において事情がどうであるのかは、すでにここまでみてきた通りである。したがってここであらためて悲劇の定義にもどって、悲劇における自由と、その自由と必然性との真の争いという事態について検討しなければならない。すでに必然性が争いの種となって働くとされていたことは確認した。それではそれが具体的にはどのようにしておこなわれると、シェリングはみているのだろうか。

「自由と必然性との争いがじっさいに生じるのは、必然性が意志そのものをその内側から破壊しにかかり、その

ため自由がまさにみずからの足で立っている場所で闘わざるをえなくなる、そういうときだけである」（V, 696）。こうして争いは、悲劇の主人公にたんに外から不幸や災いがふりかかるというしかたでではなく、主人公の内側で必然性が働くことによって、つまりは主人公みずからが自分の意志でいわば過失を選びとってしまわざるをえないというようにしてはじまるのである。そしてそのかぎり、それは紛れもない運命の悲劇のはじまりである。

ひとりの死すべき者が、宿命によって罪へ犯罪へと定められ、みずからあのオイディプースのように宿命へと果敢に挑んでいき、罪から逃れようとするが、しかしついには恐ろしくも犯罪のゆえに罰せられる、運命の仕業であった犯罪のゆえに。（……）罪人（つみびと）は、ただ運命という強大な力に敗れただけなのに、それでもなお罰せられてしまうというこのことが、自由の勝利を示すために必要だったのであり、自由を認め称えることだったのであり、自由にこそふさわしい栄誉だったのである。〔悲劇の〕主人公は宿命に対して挑まなければならなかった。そうしなければそもそも争いは存在しないし、自由の発現はありえないからである。とはいえ主人公は、必然性の支配下にあるもののうちで敗れなければならなかった。しかしながら同時に、みずからのほうでも必然性に勝たないまま、必然性だけを勝たしておくことがないように、主人公はこの――運命によって課せられた――罪さえをも自分の意志にもとづいて、受け入れ贖わなければならなかったのである。自分には避けようのなかった犯罪による罰をもみずから進んで引き受け、そうして自分の自由を失なったことをみせることでまさにそのみずからの自由そのものを証明し、しかもなおかつ自由な意志によることをはっきりと表明しつつ破滅するというのが、これこそがもっとも偉大な思想であり、かつ自由の最高の勝利なのである。（V, 696sq.）[15]

ここにあるのは、運命によって罪を負わされ、しかもその罪を理由に断罪されそのまま破滅へまで導かれていくという、運命で編みあげられた必然性の網である。しかしそこには、シェリングがこれを指して最も偉大な思想と呼び、なおかつそれを自由の最高の勝利としているように、悲劇における自由が何であるか、またどのようにあるのかがはっきりと示されていることもたしかである。

運命というかたちで必然性が張りめぐらされているなかでは、自由といえども避けがたいことを避けることは不可能である（V, 697）。オイディプースには、神託の実現から逃げる自由などありはしなかった。コリントスを離れる旅の途上で実の父親であるラーイオスにそれと知らないまま出くわすという、一見偶然としか思えないような出来事でさえも、「運命が実現するためには必然的」（V, 699）だったのだとシェリングは主張する。神託にせよほかの何にせよ、運命によって定められているかぎりすべては必然的である。しかし不可避の罪を贖い罰に甘んじることが必然的だとしても、悲劇の主人公が自分の意志にもとづいてみずから進んでその罪を引き受け罰に応じることは、けっして必然的なことではない。まさにここにだけ、悲劇におけるただ一回かぎりの自由の発露の可能性が残されている。

シェリングがギリシア悲劇のうちに認める自由とは、したがって運命による罪を自分の意志で自分に対して課する自由であり、それはつまるところ、みずから進んで必然性に敗れようとする決意にほかならない。これはたしかに、悲劇をまさに悲劇たらしめるものとしては「真に悲劇的」（V, 697）な事態にはちがいないが、これを不幸とするにはあたらないし（cf. V, 697sq.）、敗れることが何度もくりかえされた自由の勝利へと転換する仕掛けも、ちゃんとシェリングによって用意されている。

悲劇の主人公がみずから進んで運命の犠牲となる決意をするときに起こっている事態を、シェリングはつぎのようにより詳しく規定している。

受難の苦しみが最高となるまさにその瞬間、悲劇の主人公はもっとも解放され、苦しみも完全になくなっている。その瞬間から、かつては絶対的に大きなものとみえた運命のけっして敗れることのない力が、相対的な大きさしかもたないものとし

て現れてくるのである。それというのも、運命の力は意志によって克服されて、絶対的に偉大なものの象徴に、すなわち崇高な心情の象徴となるのである。(V, 698, cf. V, 467)

みずからの運命を見定め、どうにもならない必然性に屈することを決意したその瞬間、強大な必然性が決意の自由に対して相対化され、そのため必然性は自由を象徴するものとなる。つまりこの瞬間に、自由と必然性とのあいだに均衡が保たれ、そうして「自由は必然性との最高の同一性へと変容するのである」(V, 699)。したがってシェリングによる悲劇の定義にあった、自由と必然性の双方が同時に勝ちかつ敗れるという事態も、その結果生じると、された自由と必然性の完全な無差別という状態も、つまりはおよそ悲劇が悲劇として成立するということはすべてみな、悲劇の主人公が自己の運命に従う決意をする、その一瞬にかかっているということになる。しかもそのときの自由を、すなわち決意の自由の大きさを示すのが、ほかでもない必然性であるとされているからには、主人公を自己の破滅へと決意させるようにしむける運命の必然性が苛烈であればあるほど、強大であればあるほど、おのずと自由もそれだけ崇高に強力になるという構図[16]をシェリングが仕組んでいたことはあきらかである。そもそも悲劇の定義において自由と必然性が争うとされたのも、敗れる決意の瞬間にのみ、自由がそのものとして現れることができる構造だからであり、この点からしても、自由意志の発動の瞬間を「真に悲劇的」とみるシェリングの姿勢ははっきりとしている。シェリングが、ギリシア悲劇を徹底して運命と必然性の側から規定し運命の悲劇として捉えたことが、じっさいにはこの自由による決意の瞬間にいたるためであったとすれば、シェリングが捉えたギリシア悲劇は、ただ運命の悲劇なのではなく、同時に自由の悲劇でもあるものだといえよう。

ところでオイディプースは、シェリングによる悲劇の定義通り、運命による罪をみずからすすんで引き受けよう

としただろうか。劇の後半、否応なく自己の運命があきらかになっていく過程で、オイディプースは何度となく、ほかの誰でもなくまさに自分がやったのだということをくりかえす（*OT.* 819sq., 1331sq., 1379sqq.）。しかしのちにオイディプース自身、「たしかに自分から進んでやったことだ（……）しかしそのどれひとつとして自分の意志で選んだことではない」（*OC.* 521sqq., cf. 266sq., 963–968, 997sq.）といっているように、オイディプースがしてきたことはどれをとってみても、偶然ですら必然的であるとシェリングがいうのとおなじ意味で、「不運の人として生まれた」（*OT*, 1181）オイディプースの運命が実現するためには必然的なことだったのである。ただそのなかにあってオイディプースが盲となる道を選んだことは――「みずからの手で目を突いたのはほかの誰でもない、この哀れな私なのだ」（*OT.* 1331sq.）――かならずしも必然性の仕業とはいいきれないのではないか。それというのも、運命がけっして自分を殺そうとしないことに気がついた（*OT.* 1455sqq.）オイディプースが、その運命に完全に従う決心をしたことを、ひとりではなにひとつできない盲の姿以上に雄弁に示すことができるものはないからである。そのかぎりオイディプースの悲劇は、まさに運命の悲劇にして自由の悲劇であるといえるだろう。

五

叙事詩には「きまったはじまりも終わりもない」（V, 708）とする一方でシェリングは、悲劇が「絶対的に閉じられていること」（l. c.）を要求する。筋はただ外側から（デウス・エクス・マーキナーのごとく）閉じられればいいのではなく、内側から、登場人物の心情において閉じられなければならず、「この内面的な和解からこそ、悲劇が完結するために必要な調和が生じてくる」（V, 703）とシェリングは説明する。この和解はまた同時に、運命

の悲劇を引張り続けてきた運命の過酷さをやわらげしずめるためにも必要とされている。がしかし運命の厳しさをなだめるのは、シェリングもいうように「心情の偉大さ、心情の自由意志による罪の受け入れと、それによって得られる心情の崇高さ」(V, 704)、つまりはあの決意の自由であり、これによってすでに自由と必然性の均衡と無差別も実現されていたはずである。決意の自由による、自由と必然性との均衡という事態を指して、あらためて内面的な和解と調和をいうシェリングの意図を、シェリング自身が例として引くアイスキュロスの『エウメニデス』と見比べながら、最後に検討していくことにする。

「運命と神の意志、すなわちアポッローン神の意志によって」(V, 698, cf. VI, 573; Aesch. *Cho.* 269-277, 558sq., 1029-1032, *Eum*, 84, 199sq., 465, 579sq., 594sqq.) 父親の仇討ちとして母親を殺したオレステースが、母殺しという自然の法に背いた行為が招いたエリーニュエスに追いかけられ、ついにはアレオパゴスで裁かれることになる。父の仇討ちを立派に果たしたオレステースに投じられた票と、母殺しの罪を糾弾するエリーニュエスに投じられた票は同数だったが、「最後の裁きを決定する」(*Eum*, 734) アテーナーがオレステースの側に投票したため、オレステースは赦免解放される。一方エリーニュエスの怒りは説得慰撫されて、エリーニュエスはアテーナイ市民に敬まわれかつ市民たちを守る神々へと姿をかえ地下に安住する。

これがアイスキュロス『エウメニデス』のあらましであるが、アレオパゴスでの裁判をシェリングはつぎのように説明している。「アレオパゴス法廷は、必然性と自由との等しさが道徳的な世論の前で守られるために、双方の投票壺におなじ数だけ投票しなければならない。パッラス・アテーナーがオレステースを赦免するほうの壺に投じる白い石だけが、オレステースを罪から解放するが、そうなるためには同時に、運命と必然性の女神たち、すなわ

ち復讐するエリーニュエスの怒りがしずめられなければならない」(V, 698, cf. VI, 573)。

アレオパゴス法廷で投票が同数だったことを、悲劇の定義に由来する、自由と必然性が同時に勝ちかつ敗れて均衡にいたるという構造に重ねようとするシェリングの意図は、そのかぎりきわめて明瞭である。しかしながら裁判で起こったことと、それに対するシェリングの説明が、シェリング自身の悲劇の定義によって規定されてきたことからはずれていることも、それに劣らずあきらかである。

シェリングによれば、神々に対する人間の従属的関係を前提に、神々は悲劇の主人公を内側から蝕む必然性を運命として送り込んでくる。ここにシェリングは、運命という必然性と心情の自由との真の対立が生じるとしていた。オレステースの場合には、したがってアポッローンが運命であり必然性である。ところがシェリングにしたがえば、アレオパゴスで自由と同じ数の票を得たのは運命と必然性の女神たち、すなわちエリーニュエスであり、アテーナーがもたらす和解も、当然オレステースという自由とエリーニュエスという必然性とのあいだの和解である。しかしこれでは自由と必然性との争いと、自由と必然性との和解が、それぞれ異なる必然性を通じてなされることになり、たとえ一方で自由と必然性との無差別が実現されるとしても、それで充分な解決が得られるわけではないはずである。(17)

シェリングの用意した解答は、エリーニュエスが「人間と同じ地平にまで降りてくる」(V, 703) ということである。エリーニュエスによってもたらされる和解は、エリーニュエスが「神々としてあるのではなく、人間の運命へと降りてくることでなされる」(l. c.) ものなのであり、したがってこのときオレステースにとっては、運命はもはやアポッローンではなくエリーニュエスということになる。そしてそのかぎりで和解は内面的であるというの

が、シェリングの主張である。こうした解釈が『エウメニデス』にまったくあてはまらないものだとはいえないだろう。父の仇討ちという正義に従いながらも、母親を殺したという事実に脅え狂わんばかりになっているオレステース自身の心が、エリーニュエスを招いたとも考えられなくはないからである。そのエリーニュエスは「正義の神と運命の神と交渉をはじめる」(l. c.) とシェリングは続ける。これは『エウメニデス』にそって考えれば、それぞれがアレオパゴスの法廷を用意するアテーナーと、オレステースに母殺しを命じるという点でまさにオレステースの運命であったアポッローンを指していわれていることはあきらかである。しかし和解にいたるオレステースの運命は、いまやアポッローンではなくエリーニュエスとなっていたのではなかったか。

こうした混乱はいずれも、そもそもシェリング本人が必然性を指してそれをしばしば運命といい換えることから生じてきている。しかしながらシェリングの悲劇論は、自由と対をなす必然性からはほんらい峻別されるべき運命を必要としている。そのことを端的に示しているのが、「自由と必然性の争いは運命によってしか結着がつけられないので、自由と必然性の争いが、運命をいわば招来するのである」(V, 645) という、シェリングの言葉である。自由と必然性との均衡に加えてさらに和解と調和がいわれたのも、和解と調和をもたらすことのできる、この必然性とは区別される運命を引き出すためだったのであり、そのためにシェリングは『エウメニデス』を例とするのである。

票はそれぞれ同数であったにもかかわらず、アテーナーの裁定で実質的には敗れることになったエリーニュエスをなだめ説得することにアテーナーが成功したのは、そもそもそのアテーナーの背後に絶対者ゼウスの雷があったからである (*Eum*, 797, 826 *κἀγὼ πέποιθα Ζηνί*, 850)。またアポッローンがオレステースに母殺しを命じたのも、

もとはといえばそれをゼウスが神託で告げたからそうしたのである（*Eum.* 615–621, 713 *χορσμοὺς τοὺς ἐμοὺς τε καὶ Διὸς*）。こうしてオレステースに父殺しをさせながら、同時にエリーニュエスに追いかけられるようにもし、そして最後にはオレステースを救う（*Eum*, 759sqq.）というしかたで、オレステースの悲劇を最初から最後まであやつっているのが『エウメニデス』における絶対者ゼウスである。シェリングの悲劇論において、自由と必然性とのあいだに真の争いをひき起こし、自由の決意をまって和解と調和をもたらす運命も、まさにこの『エウメニデス』のゼウスをそのままなぞるものでなければならない。シェリングにとっては、芸術こそが宇宙を映す鏡であり、そのなかでも悲劇は「あらゆる芸術の本質を最高に顕すもの」（V, 687）として、宇宙が絶対的同一性としての絶対者であることを十全に示すものだからである。シェリングの悲劇論は、悲劇が運命によってはじめられ運命によって調和のうちに閉じられることを、つまりはこの宇宙が絶対者のうちに調和していることをあきらかにしようとする企てなのである。

注

（1）シェリングからの引用は（とくに注で指示する場合をのぞいて）原典版全集（*Friedrich Wilhelm Joseph von Schellings sämtliche Werke*, ed. K. F. A. Schelling. Stuttgart 1856–61）の巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）でその箇所を指示する（引用文中の傍点は、原文のものと一致するしないにかかわらず、すべて私の強調である）。なお「芸術哲学」は、一八〇二年の冬学期から（?）一八〇五年の冬学期までに（?）数回、そのつど手直しされつつ講義された。Vid. *F. W. J. Schellings Briefe und Dokumente*, ed. H. Fuhrmans. Bonn 1962–75.［*BuD*］I, 163, 235sqq., 301sq., II, 534n., III, 630sqq.; E. Behler, Schellings Ästhetik in der Überlieferung von Henry Crabb Robinson. *Philosophisches Jahrbuch*, 83 (1976), 135sqq.

（2）「悲劇について」が論じられていて、しかも本論攷でとりあげられていない問題（『芸術哲学講義』全体のより詳しい説明や影響関係など）を扱っているものを挙げておく。E. L. Fackenheim, Schelling's Philosophy of the Literary Arts. *Philosophical Quarterly*, 4 (1954); P. Szondi, *Poetik und Geschichtsphilosophie II*. Frankfurt 1974; 西村清和「シェリングにとってマクベスは悪党か?」長島隆ほか篇『シェリング読本』（法政大学出版局）一九九四年。

（3）V, viii.〔Fragment einer Vorlesung aus dem Jahr 1803〕

（4）「映し出す」という構造については Cf. *BuD*, II, 436〔Schellings Briefe an A. W. Schlegel, 3. Sept. 1802〕; V, 369; VI, 197〔*System der gesammten Philosophie*... 1804.〕; III, 610, 615sq.〔*System des transscendentalen Idealismus*. 1800. これについては私の論文「シェリング『超越論的観念論の体系』における生産の論理」『フィロカリア』第11号（一九九四年）、四十四ページを参照のこと〕

（5）抒情詩、叙事詩、劇詩の三分類が古典古代の文芸によくあてはまること、したがってつねにこの分類が時代を越えて成り立つとはシェリングも考えていない（V, 639）。またたとえば抒情詩であれば、その内部での一層の細分化も可能であるとされる（V, 643）。さらに抒情詩、叙事詩、劇詩という順序は演繹的に導出される順序であって、歴史的発展の順序とは異なることも、あらかじめシェリングはことわっている（V, 639）。さらに cf. VI, 572sq.〔*Syst. d. ges. Phil.*〕

（6）ソフォクレースのテキストは *Sophoclis Fabulae*, edd. H. Lloyd-Jones et N. G. Wilson. Oxford ²1992. により、またアイスキュロスのテキストは *Aeschyli Septem quae supersunt Tragoedias*, ed. D. Page. Oxford 1972. による。いずれも各種の邦訳を参考にした。

（7）「エウリーピデースは、最後にはエーレクトラーをピュラデースと結婚させる」（V, 710, cf. Eur. *Or*. 1658sq.）ように、神々との関係よりも人間界内部の関係を重視するとみなされ、結果アイスキュロスやソフォクレースにくらべ低い評価しか与えられていない（vid. V, 708–711.『ヒュッポリトス』のみが例外的にとりあげられるのは、ファイドラーがアフロディーテーによって「罪なき罪人」にされてしまうからである）。

（8）Cf. Fr. Schiller, Tragödie und Comödie. *Nat. Ausg.*, XXI, 93.

（9）Vid. M. Griffith, *The Authenticity of Prometheus Bound*. Cambridge 1977.; M. L. West, *Studies in Aeschylus*.

Stuttgart 1990. 51–72.

(10) *PV*. 10, 222, 224, 305, 310, 357, 736, 756, 761, 909, 942, 957, 996.

(11) V, 554; cf. W. Kraus, Prometheus. *Pauly-Wissowa RE*. 45, 1. Stuttgart 1957.

(12) 『縛られたプロメーテウス』とほかのアイスキュロスの作品でのゼウスの描かれかたをめぐっては、解釈上、論争の歴史があるが、本論攷での解釈はこの問題には関係しないものと考えている。Cf. H. Lloyd-Jones, Zeus in Aeschylus. *Journal of Hellenistic Studies*, 76 (1956).; C. J. Herington, Aeschylus: the last phase. *Oxford readings in Greek Tragedy*, ed. E. Segal. Oxford 1983.

(13) プロメーテウスを解放するほどに人間としての倫理性を具現し、「そんなひとを二度とみることができない」ほど「地上でもっとも崇高な人間」(Soph. *Tr*. 811sq.) と誰もが認めていたヘーラクレースが、いつしか人間としての弁えを忘れ、ひとりの「その美しさが命とりとなった」(*Tr*. 465) 女を手にいれるために国をひとつ滅ぼすという、まさに人間に定められた限界を越えた暴挙におよび、ついには死すべき者としての人間以外の何者でもないことをゼウスから神託で教えられ (*Tr*. 1169–1172)、そうして死んでいくさまを描いたソフォクレースの『トラーキーニアイ』などを考えれば、シェリングがソフォクレースを、人間の倫理性をもっとも磨きあげて劇化したと評価することも納得がいくだろう。

(14) Cf. Alexandros Aphrodisiensis, *De fato*, XXXI. アフロディーシアスのアレクサンドロスの（かなり誇張して）伝える、クリューシッポスに代表されるストアの「運命の劇」という解釈は、必然性の徹底という点でシェリングをはるかに凌駕する。それによれば、ラーイオスへの神託「(……) もし子供をもうければ、その子はおまえを殺すだろうし、おまえの家はみな血のなかを行くことになろう」(Eur. *Phoe*. 19sq.) は絶対に実現する。したがってオイディプースが捨て子とならなくても、本当の親が別にいるとも知らないまま育てられなくても、コリントスから逃げ出す途中、ラーイオスにそのひとと知らずに出くわすことがなくても、神託の予言は実現する。「なぜならもし実の両親の家で実の子供として育ったならば、両親を見誤ることはないだろうし、そうして一方を殺しもう一方と結婚することだろう」(*De fato*, XXXI, 201, 19sqq. 〔I. Bruns〕)

(15) Cf. Friedrich Wilhelm Schelling, *Historisch-Kritische Ausgabe*, Reihe I: Werke 〔*AA* I〕3, 160sq. 〔*Philoso-*

phische Briefe über Dogmatismus und Kriticismus. 1795.〕

（16）「絶対的自由そのものが絶対的必然性である」（V, 699; cf. *AA* I, 3, 101, 8sq.〔Vid. 49n., 3〕）

（17）「罪はただ実際の償いによってのみとりのぞかれうる」（V, 698）ということで、シェリングが裁判ではなくアポッローンの神殿での浄めを指していて、すでにそれによってアポッローンの必然性がとりのぞかれているのだと考えることもできるかもしれないが、それにしても悲劇の定義に抵触していることにかわりはない。

〔九十六年九月〕

（大学院後期課程学生）